



# 人文知コミュニケーターとは

人文知コミュニケーターは、社会とのコミュニケーションを通じて、研究成果を適時適切にわかりやすく発信し、同時にそこから研究課題を発見し研究を活性化する新しいタイプの研究者です。人間文化研究機構総合情報発信センターが人文系の新たなキャリアパスとして開拓しています。

人文知コミュニケーターは、人間文化研究機構の各機関に配置され、学術資源・情報の発信、広報、社会連携活動等を推進すると同時に、自身の研究も発展、深化させるよう取り組んでいます。配置機関の受入教員から指導や助言を受けながら、本部に配置された総合情報発信センター研究員とも連携して活動しています。また、人文知コミュニケーター間の自発的な研究会、独自の発信等も活発に行っています。



▲双方向コミュニケーションの実践  
(日本科学未来館での対話型イベント)



▲人文知コミュニケーターウェブサイト  
(<https://www.nihu.jp/ja/training/jinbunchi>)

# 人間文化研究機構とは

人間文化研究機構は、人間文化研究に関わる6つの大学共同利用機関\*すなわち国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館によって構成される大学共同利用機関法人です。人間文化研究について、文理を含む300名を超える国内最大級の研究者集団として、推進しています。

また、人文知コミュニケーターを養成して研究と社会の連携強化をはかり、各界の著名人（経済・文学・美術・自然科学・マスコミ等）によって設立された「人文知応援フォーラム」とも連携して、人文学のプレゼンス向上に力を入れています。

\*全国の大学の関連研究者（研究者コミュニティー）のニーズに応え、また、広く海外の研究者とも連携を図りながら、学術研究を推進する中核的研究拠点。

# 総合情報発信センターとは

人間文化研究機構本部に設置した総合情報発信センターは、人間文化研究に関する情報発信及び広報活動を統合的に行うとともに、人文系における新しいキャリアパスの形成を目指し、人文知コミュニケーターの養成を本機構の各機関とともに推進しています。

# 人文知コミュニケーションスキルアッププログラム

総合情報発信センターでは、人文知コミュニケーションを養成するために、様々なスキルアッププログラムを行っています。各プログラムでは、人文知コミュニケーションとして求められる3つのスキルを身に付けることを目指しています。



## ◆ 歴博・民博での研修

展示場やバックヤードの見学を通して、研究成果を展示する際の工夫や、展示から得た反応を研究現場に還元し、研究の高度化につなげている実例を学びます。



▲ 歴博での展示場見学

## ◆ 印刷博物館での研修

凸版印刷と連携し、印刷博物館での研修を行っています。産業博物館の広報活動や地域連携活動、ブランディングについて、理解を深める機会となっています。



▲ 印刷博物館での「動態展示」体験

情報収集  
・ 分析力

「あつめる」  
スキル

伝達力  
・ 活用力

「ひろめる」  
スキル

創造力

「みせる」  
スキル



## ◆ 日本科学未来館での連携イベント実習

日本科学未来館との連携を通じ、共同研究やイベントを実施することで、社会との双方向コミュニケーション力を高めます。

### これまでの 実践例

- トークセッション「のぞいてみよう！ 土・ミツバチ・食の世界～持続可能な社会を目指して」(2019年3月16日) / 金セッピョル (地球研)
- イベント「変わりゆく北極について考えるボードゲーム『The Arctic』体験会」(2019年8月8日) / 大石侑香 (民博)
- オンラインイベント「国文学研究資料館×日本科学未来館 和書からさぐる！ お江戸のサイエンスとライブラリー」(2020年8月9日) / 桑汐里 (国文研)

## ◆ 筑波大学・国立科学博物館との連携講座

2018年度から、筑波大学と国立科学博物館と共同で開発した授業科目「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」を実施しています。人文知コミュニケーションは実際に講師として講座を企画し、大学の教育力強化に貢献しています。



◀ 連携講座「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」

## ◆ 大学共同利用機関シンポジウムへの参画

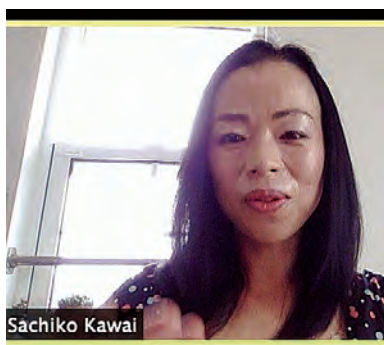
大学共同利用機関シンポジウムでは、本部と各機関がブースを出展し、展示を行います。人文知コミュニケーションは来場者との対話を通じて、人文知コミュニケーション事業や研究の魅力を発信しました。



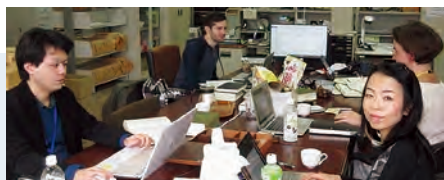
▲ 大学共同利用機関シンポジウムのブース

# 河合 佐知子 Kawai Sachiko

〈国立歴史民俗博物館〉



▲ Summer Online Meetings, USC Project for Premodern Japan Studies (May – August 2020)



▲ Engi shiki Meetings 2018-2020\*

\*人文知コミュニケーターとして活動する以前より本研究に携わっていました

## 専門分野、現在の研究テーマについて

私は米国で歴史学を学び、中世女院の荘園における「権利」と実際に行使できた「力」のギャップやジェンダー格差に注目して、女院が逆境の中でどう方策を練りつつ生き抜いたかを研究してきました。現在は前近代温泉文化史にも取り組んでいます。

## これまでの主な活動とその成果

歴博人文知コミュニケーターの私が担う役割に、日本学研究の幅広い発信と国際的コミュニケーションの促進があります。COVID-19 拡大のため活動が制限されている中でも、これまで培った人的ネットワークを活用して国際コミュニケーションを行い、情報発信に励んでいます。今年5月からは、南カリフォルニア大学や UCLA 等の研究者・院生と毎週オンライン・ミーティングを開催し、研究成果、オンライン授業の効果的教授法、世界史における日本史の位置づけとその方法論等、さまざまなトピックで議論をし、国を超えた情報交換や双方向的な学術交流を進めています。

また、歴博の基幹研究プロジェクトのユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」に参加し、日英両言語でその成果を発信する予定です。

## 研究者として得た経験

研究者が専門や言語の壁をどう乗り越え、知識の共有を図るのか。これは、グローバル・レベルで日本学の存在価値を維持していくために重要な課題です。日本史を海外で紹介する場合は特に、言語や専門の違いが双方向コミュニケーションの障壁となります。しかし、そこにこそお互いが学び合えるチャンスがあります。用語をどう訳すか、主語は誰か（ジェンダーは？複数か単数か？）等、さまざまな疑問を共に追求することにより、より深い理解が生まれたこともありましたが、国際的学術交流を通して日本を外側から捉える機会が増えたことにより、自分の当たり前を問い直し、新たな課題発見に繋げることもできました。

## 今後の研究・活動の展望について

興味深い課題を専門家に限らず幅広い層に分かりやすく提示し、日本学研究を海外でも進展させることに貢献したいです。また、日本科学未来館と連携したジェンダー展示企画、あるいは前近代温泉文化史に関わるプロジェクトの企画も模索中です。来年秋には、女院研究会メンバーと台湾ジェンダー学国際学会における報告も予定しており、日本女性の歴史の紹介を通じた国際的雙方向コミュニケーションを図りたいです。

## 専門分野、現在の研究テーマについて

専門は15世紀～17世紀の日本の語り物文芸（幸若舞曲、説経、古浄瑠璃）です。近年は語り物を題材とした絵巻、絵入り本、屏風などの絵画作品や、源義経を題材とした語り物について研究を行っています。また、学生時代から民間信仰や在地伝承といった、地域に根差した文化にも関心をもっています。地元の伝承にちなむお菓子や、寺社の絵入りのお札を集めています。

## これまでの主な活動とその成果

- ①展示室でのギャラリートーク
- ②立川市西砂図書館主催の和本づくりワークショップでの絵巻作り（2019年7月21日）
- ③企画展示「本のかたち 本のこころ」の展示準備・図録の作成（2019年10月15日～12月14日）
- ④古典の森モニターツアーにおけるギャラリートークおよび和本づくりワークショップ（2019年11月23日・30日）
- ⑤オンラインイベント「国文学研究資料館×日本科学未来館 和書からさぐる！お江戸のサイエンスとライブラリー」（2020年8月9日）
- ⑥企画展示「戦国武将たちの愛した文学～幸若舞曲～」(2020年11月4日～12月25日)



▲和本ワークショップでの絵巻づくり (②)

## 研究者として得た経験

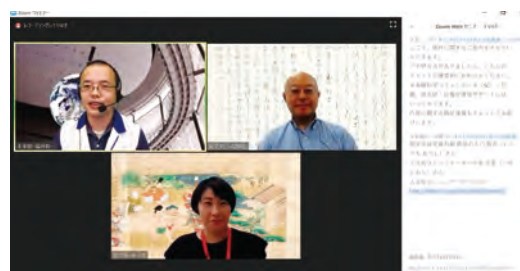
一つには、古典という窓を通じて、社会のあらゆる現象に関心を向ける姿勢が身についたこと、二つには、これまで関わりの薄かった分野の方と活動するなかで、凝り固まっていた自分の研究方法に新しい風が吹いたことです。例えば、今夏開催された日本科学未来館とのオンラインイベントでは(⑤)、文系の視点でしか読んでこなかった貝原益軒の『大和本草』という江戸時代の書物を、ハエの描き方や、江戸時代の食生活などに関して、理系のかたとともに読んでゆくことで、私自身の研究の視点がガラッとかわるような刺激がありました。論文や学会発表で自身の成果として出すには、まだまだ時間がかかりそうですが、このお仕事で気づいたことを、将来の研究計画に反映したいです。

## 今後の研究・活動の展望について

任期終了が迫っているため、新しく着任される人文知コミュニケーターが安心して活動できるような環境づくりに力を入れています。具体的には、これまで一緒にイベントを開催した他機関とのつながりを維持し、イベントの定期開催を実現すること、また、国文学研究資料館のデータベースを活用したオンライン型のコンテンツの提供（古典籍ぬり絵、ワークショップで行った和書づくりの動画の提供、中高生にむけた古典に親しむコラムの執筆、くずし字クイズなど）を、現在企画しています。

桑 汐里  
Kume Shiori

〈国文学研究資料館〉



▲日本科学未来館とのオンラインイベント (⑤)



▲ギャラリートーク (①)



古典の森モニターツアーで行った江戸時代のレシピ本によるスイーツ作り (④) ▶

## 岩崎 拓也 Iwasaki Takuya

〈国立国語研究所〉



### 専門分野、現在の研究テーマについて

日本語学、日本語教育学、計量国語学が専門です。句読点やカッコといった日本語の表記について興味があり、研究しています。

句読点やカッコは使い方一つで読みやすくも読みにくくもなります。読点「、」と句点「。」は日本語を書くさいに必ずと言っていいほど使う符号ですが、実は、その使用規則は明確には定まっていません。また、カッコと句点の組み合わせ方などは、学校で習った使い方と社会一般での使われ方とは全く違うというおもしろい現象が見られます。

最近では、句読点やカッコ以外の符号にも着目しており、さまざまな符号をつうじて「見やすい日本語」とはなにかを考えています。ビジネス文書や日本語教育への提言を目指しています。

### 人文知コミュニケーターを志望した理由

研究と社会のつなぎ役を担う人文知コミュニケーターとして、研究成果の発信や活用実践的に参画することで、よりよい社会を作るための一助になりたいと思ったからです。

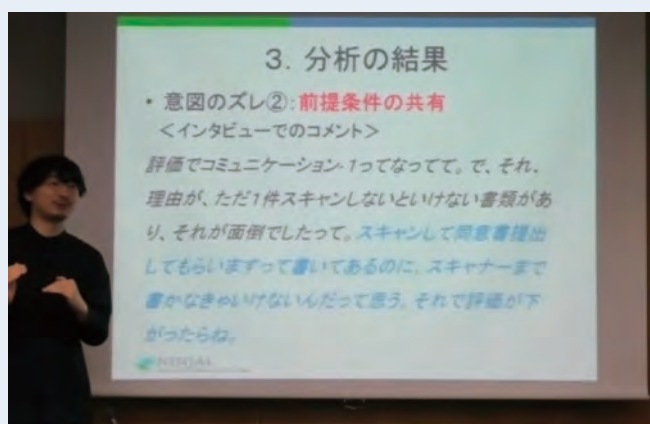
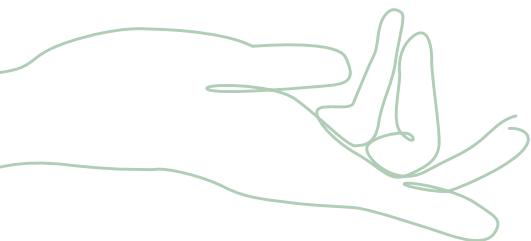
昨今、テレワークによる仕事が台頭してきているなか、文字によるコミュニケーションが重要視されるようになってきました。文字によるコミュニケーションでは、誤解を招かないように適切な文章を書くこと、見やすくわかりやすい文章を書くことが大切です。

句読点やカッコの使い方などといった表記についての課題を知ってもらうだけでなく、さまざまな意見を取り入れる必要があると考えました。このように、私の研究には社会との対話が欠かせないと考えたことも一つの動機です。

### 今後の研究・活動にむけた抱負

現在、民間企業とともにビジネス文書で使われる句読点やカッコといった符号の分析を行っています。符号の使い方と受注の関連性についてAIを用いたモデル構築を行い、見やすい文章の書き方を発信していきたいと考えています。

また、国立国語研究所の評判分析についても検討しています。社会に向けたイベントが実際にどのような評価をされているのか、いただいたコメントをテキストマイニングして可視化を試みたいと思います。



▲シンポジウム「ビジネスと日本語の接点」での発表



▲文章の読みやすさについての調査風景

## 専門分野、現在の研究テーマについて

音楽学、とりわけ東西の音楽療法史・文化交流史に関心をもって研究に取りこんでいます。現在は明治～昭和戦前期の音楽療法実践について、カルテや実践記録書、視聴覚資料などを分析しながら、当時の様子や日本音楽療法に通底する特徴を探っています。並行して、幕末の開国期前後に日本をテーマにして作られた西洋の音楽作品（ジャポニズム楽曲）の研究にも取り組んでいます。

## これまでの主な活動とその成果

音楽療法史研究の成果は各種学会での発表や論文投稿だけではなく、公開講演会や市民講座などを通じて一般の方々への紹介も積極的におこなっています。そこでは、音楽療法史研究から抽出した実際の音楽を再現演奏するなど、言葉だけでは伝わりにくい、よりリアルな歴史観の共有に努めています。一方、ジャポニズム楽曲については日文研のウェブサイト「日本関係欧文史料の世界」に各作品の解説と演奏音源を定期掲載し、作品の魅力をより広く届けられるよう試行錯誤しています。また、現在は自身の研究を生かした展示会やシンポジウムの開催に向けて準備を進めているところです。

## 研究者として得た経験

人文知コミュニケーターとなり、様々な領域の専門家と対話する機会が格段に増えました。その経験がいま、自身の研究深化や拡がりに大いに繋がっていると感じています。例えば、人文知コミュニケーターの目線から日文研所属研究者の活動や所蔵資料の情報をお届けしている「人コミュ通信」。様々な分野の研究者にインタビューをして原稿を作成するのですが、対話の中で新知見を学ぶのはもちろんのこと、異分野の研究動向を自身の研究に置き換えてみることで新たに気づくことも沢山あります。また、対話している研究者が伝えたいことを丁寧に咀嚼・解釈し、分かりやすく社会へ発信していくという手続きは、「理解する」「書く」「伝える」という研究にも必須の力を磨く貴重な機会ともなっています。

## 今後の研究・活動の展望について

さらに分かりやすさ、面白さを追求した成果発信の手法を探っていきたいと考えています。また、音楽療法史は医学・薬学史、音楽学、民俗学、宗教学など多分野にまたがる学際的な研究領域なので、文系・理系問わず様々な分野の研究者と連携しながら、実社会にも役立つ「活きた人文学研究」構築への糸口も模索していきたいと思います。

光平 有希  
Mitsuhiro Yuki

〈国際日本文化研究センター〉



▲音楽療法史研究の様子



▲「人コミュ通信」インタビュー



▲日文研プロジェクト「外書の研究」での作業風景

# 金 セツピョル Kim Satbyul

〈総合地球環境学研究所〉



## 専門分野、現在の研究テーマについて

文化人類学、その中でも葬送儀礼研究と映像人類学を専門としています。葬送儀礼研究は、現代の人々がいかにか死と向き合っているかを、葬式と墓の現状から読み解くものです。私は、逆説的ですが、墓を設けないという人たちについて、日本と韓国を舞台に研究してきました。一見、個人的な選択に見えるこのような現象を、近代以降の社会文化的背景との関連で究明しようとしています。

また、現地調査の一環として映像を撮影し、それに対する反応を分析する映像人類学的調査に取り組んでいます。研究成果も、論文だけでなく映像人類学作品として発信しています。

## これまでの主な活動とその成果

映像を媒介として、研究と現地社会、市民、他分野を結ぶ活動をしてきました。例えば、ブータン王国で映像を撮影し、映像に対する現地の人々の解釈を研究に取り入れることで、双方向の研究を実現しようとしています。その成果は、映像人類学作品として編集しました。また上映会を開き、日本の市民からの意見も集めてきました。昨年度は、葬いについて研究している研究者や、葬いを連想させる作品制作をしているアーティストをお招きし、研究や創作、発信の意義や方法に関する議論を交わしました。この成果は一般書として刊行する予定です。

## 研究者として得た経験

研究を多方面に拡張していく試みを通して、研究を社会に還元することは、責務であるだけでなく、研究成果を社会の文脈に位置づけ直す作業であり、そこから学ぶことがたくさんあることに気づかされました。

また、若手研究者にとっては、共同研究や、大きなイベントを主催する機会は多くありません。人文知コミュニケーター活動を通して、そういった機会に恵まれました。専門分野における評価に直結するものではありませんが、研究者として少しは成長できたと思います。

## 今後の研究・活動の展望について

近年の韓国の葬送儀礼研究では、その変化の速さが注目されてきました。しかし「墓を設けない」選択を掘り下げてみると、伝統を持続させようとする文脈が読み取られます。日本とは対照的と言えるこのような傾向を近代化との関連で研究していきたいと考えています。また、これまで行ってきた人文知コミュニケーターとしての活動を整理し、学術的に位置付ける作業にも取り組んでいくつもりです。



▲国立歴史民俗博物館で、日本の葬列における輿の調査中



▲日本科学未来館での映像上映＆トークイベント  
(2019年3月16日)



▲研究者とアーティストによる「葬い」映像研究合宿  
(2019年9月16日～18日)

## 専門分野、現在の研究テーマについて

専門は文化人類学、シベリア・北極地域研究です。自然と人間とのかかわりあいに関心を持ち、(1) 寒冷な環境に人類がどのように適応していったか、(2) 気候変動やソ連崩壊といった自然環境・社会経済変化に対してシベリア先住民はどのように文化生態的に適応してきたかについて研究してきました。

## これまでの主な活動とその成果

文部科学省の補助事業「北極域研究推進プロジェクト (ArCS)」(2019.5-2020.3) では、北極環境変化と社会への影響について学際的共同研究を行い、その成果発信として、日本科学未来館とともに北極環境学習ツール(ボードゲーム)『The Arctic』(木村元総括)を制作しました。自身も ArCS のメンバーとしてこの開発に携わり、北極域先住民と文化人類学者の視点を他の開発者らと共有しゲームに盛り込みました。完成後は、日本科学未来館、国立民族学博物館、大学等で『The Arctic』を使ったワークショップを実施しました。

成果として、北極域温暖化の影響対策には、利害を超えた協力が必要であることを社会に伝え、また未来を担う中高生たちに北極研究に興味を持ってもらうことができました。

## 研究者として得た経験

『The Arctic』の独創的特徴は、自然科学と人文科学が共同で成果発信まで行った点です。開発にあたっては、文理が互いの研究成果の内容を知るだけでなく、人文科学だけではできなかった、北極域の変化の激しさと複雑な自然と人との相互関係を具体的に表現することが可能になりました。

また、研究者としてゲームの進行や解説を行う中で、こうしたシリアスゲームの利点を学ぶことができました。ひとつは、ゲームを用いることで参加者同士のコミュニケーションが促進され、個々の知識や関心、意見、学んだことが共有され理解・思考が深まる点です。もうひとつは、参加者がプレイをとおして北極の複雑さや研究成果を批判的に受け取り、ゲーム自体を評価する姿勢を持ち、それを研究者側に還元してくれた点です。

## 今後の研究・活動の展望について

より多くの人に北極環境変化について知ってもらうために、『The Arctic』を活用した大学や中・高校への出前授業、研究機関・企業研修を実施します。ワークショップを実践する中では、ルール追加や事前事後学習の工夫により、多様な学習目的に対応できることが分かりました。今後はより効果的な実践方法を模索していきたいです。



▲北極環境学習ツール(ボードゲーム)『The Arctic』



▲三重大学におけるボードゲームワークショップ(2019年12月4日)



▲民博におけるワークショップ・スタッフ指導(2020年3月)

# 人文知コミュニケーター経験者へのインタビュー

新永 悠人 Niinaga Yuto

〈元：国立国語研究所 人文知コミュニケーター〉  
国立大学法人弘前大学人文社会科学部助教



## Q. 人文知コミュニケーターを目指したきっかけ

もともと、自分の中で研究と教育には不可分な関係があると思っていて、自分のやっていることの意義やロジック、あるいはデータを全く前提知識がない人にきちんと説明できる力は重要だと考えていました。自分が中途半端にしか理解できていないことは、その分野に詳しくない人にはちゃんと伝えることができません。非専門家に丁寧に伝える力を鍛えることは、自分の研究を鍛えることにも繋がると思っていました。

僕の調査は現地滞在型なのですが、僕に方言を教えてくれる話者の方々だけではなく、お世話になる地域の人たちなどからも「自分たちの村の言葉を研究してくれるのはうれしい」、「でも、どのような意味があるのかな」という問いかけをよくもらいました。それに対し、事あるごとに説明する必要性がありました。自分の研究の特性上、専門家ではない人々と普段から接する機会が多いため、知らないうちに人文知コミュニケーターに近いような考え方を持つようになったのだと思います。

## Q. 活動において学んだこと

人文知コミュニケーターとして一番力を入れた活動に、方言版異言語脱出ゲームがあります。異言語 Lab. という団体と協力してゲームを作りあげていったのですが、僕が伝えたい「あらゆる言葉（方言）には独自の体系がある」ということだけではゲームとしての面白さにつながらないんです。ゲームとしての面白さと僕が伝えたいことのバランスを取るのが非常に難しくて。でも、異言語 Lab. の代表である菊永さんが見事にそのバランスを取ってくださって、それを間近で見ることで、面白さの伝え方や距離感のようなものが前よりも具体的になった気がします。専門外のことを知ることができたというのは、すごく意義があったと思います。

## Q. 3年間の活動を通して社会や研究との向き合い方に変化はあったか

自分のやっている研究の意義がより明確になりました。これまでも人文学研究は実学ではないので、お金にならないし、人の役にも立たないと言われることが結構ありました。しかし、今ならそのような考えに対し、どのように答えるべきかが少しだけ分かります。人がお金を稼ぐのは、生きるその先に何かをするためだと思います。おそらく、医学や法学や経済学の実学的な側面には、人間を基本的な状態（健康で、不自由の無い状態）にする力はあるけど、その先については特に何も示しません。ですが、いわゆる虚学といわれている人文学（および、「実学」と呼ばれて

いる分野の非実学的な側面）は、その一歩先にある世界や人間、自然などに対する謎への好奇心を刺激します。データに基づいて論理的に考えると世界はこんなふうに見えてくる、その好奇心を刺激される面白さ、謎が一つ解けたときの喜び。人生における喜びの中の1つには、そんな喜びが確実に大きく存在すると僕は考えます。

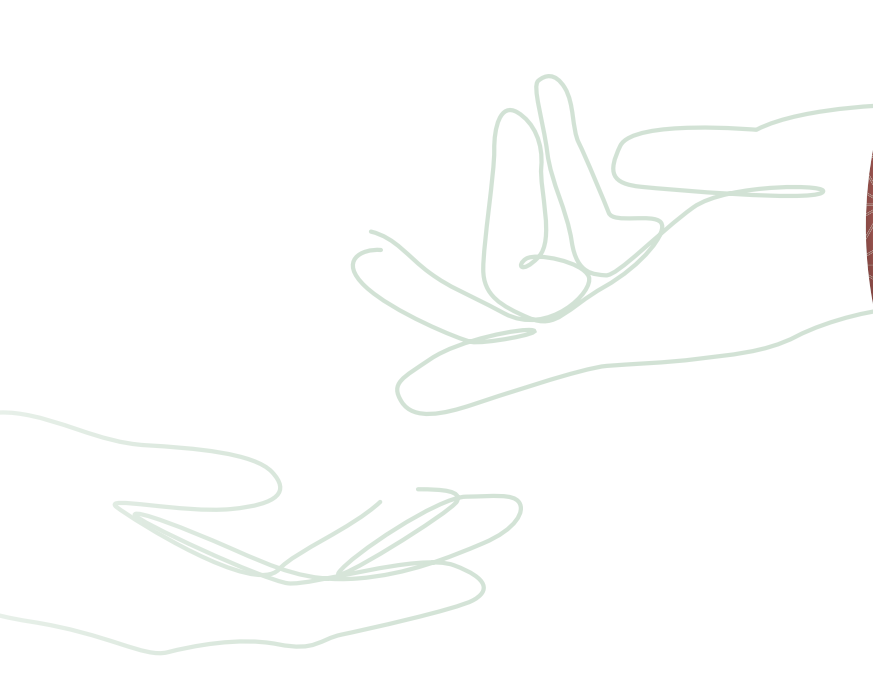
## Q. 今後の活動について

みなさんもそうだと思いますが、自分がやっている研究をみんなに知ってもらいたい、面白がってもらいたいと僕も思っています。とはいえ、「人として生きるためには言語学を学ぶ必要がある」などとはまったく思っていない。ただ、こんな面白い世界もありますよと、そしてその価値は世界に存在する様々な大切な魅力の1つですよ、と伝えたい。研究は専門家にだけ分かればよく、非専門家には別に届かなくてもいいという考え方をする人もいるかもしれませんが、それは自分で自分の属する研究界の足場を弱め、狭めることになると思います。自らの専門知を誰にでもアクセス可能にすることは全ての研究者にとって重要なことですし、あらゆる研究者が人文知コミュニケーターであるべきだと僕は思っています。

「人文知コミュニケーター」を名乗るようになってから、実はたくさんの人文知コミュニケーターがこれまでも存在していて、今も存在していることに気付けたのは自分にとって大きな収穫でした。特に、伝える内容の大切な部分をできる限り維持したまま、面白く、分かりやすく伝えようとされている方たちを本当に尊敬します。そのような先達の在り方に自分も続こうと思っています。

このように言うと、「若い世代にぜひ頑張ってもらおう」「その志にエールを送りたい」と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、学問的知識や経験においては、それらを積み重ねて来られた大御所といわれる方たち、あるいは定年退職した先達には到底かないません。また、若い世代は自分の属する研究界の足場が弱まり、狭まっていることを（研究職での就職の困難を通して）強く実感しています。従って、むしろこれまで学問的知識や経験を高めて来られた各研究界の先達の方々にこそ、「人文知コミュニケーション」の先頭に立って活躍していただき、若い世代のあこがれる存在になって欲しいと心から思います。





# 人文知 コミュニケーター 養成事業の展開

人間文化研究機構  
総合情報発信センター研究員

堀田 あゆみ  
Hotta Ayumi

## 人文知コミュニケーション研究会の定期開催

関東と関西にある人間文化研究機構の6機関に配置された人文知コミュニケーター同士の情報共有と連携を図るため、2020年度に人文知コミュニケーション研究会を立ち上げました。月1回のペースでオンライン会合をもち、それぞれの活動や時事問題について、各専門分野からの意見交換や議論を行うことで、「人文知コミュニケーション」に関する実践面・学術面双方における理論の拡充を目指しています。

## Web 連載『くらしに人文知～コロナ時代を生き抜く』の開始

研究会の発足とともに人文知コミュニケーターの発案によって、初の連携企画『くらしに人文知～コロナ時代を生き抜く』のWeb連載が始まりました。新型コロナウイルス感染症によって引き起こされた「危機」に際して、人文学の研究者は何をすべきか。社会と研究をつなぐ人文知コミュニケーターに今できることは何か。そのような問いから、人文知コミュニケーターが生活者の視点に立って、時事のトピックを研究者としての独自の眼差しで掘り下げ社会に届けようとしています。

<https://www.nihu.jp/ja/training/jinbunchi/special/kurashi>

## 筑波大学大学院連携講座

筑波大学、国立科学博物館との連携講座科目「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」では、人文知コミュニケーターが実際に教壇に立っています。人文知コミュニケーターとしての活動紹介だけでなく、活動や研究会を通して得たさまざまな視座や学術的知見を大学院生に伝えています。本講座を通して未来の研究者の卵たちに、分野にかかわらず、いかに人文知コミュニケーションの実践が困難であり、かつ必要不可欠であるかを経験的に学ぶ機会を提供しています。

## 研究者・教育者としての活躍

自身の研究に邁進するだけでなく、常に研究者としての自らを社会のなかに位置づけ、社会との双方向コミュニケーションのスキルを身につけた人文知コミュニケーターは、新しいタイプの研究者であり教育者であるといえます。これまで、本機構で採用された計7名の人文知コミュニケーターのうち、2名\*が国立大学で教鞭をとるという新たなステップを踏み出しており、今後も各地に「人文知コミュニケーション」の裾野が広がることが期待されます。

\*うち1名は2020年10月から国立大学講師に着任



社会と研究の現場をつなぐ

## 人文知コミュニケーター 事業報告書 2020

---

2020 年 8 月 31 日

大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構 総合情報発信センター

TEL : 03-6402-9200 (代表)  
<https://www.nihu.jp/>